

ワークショップ

真正で探究的な学びを実現するパフォーマンス評価

開催日

2026 年 8 月 19 日（水）13:00-16:00

開催場所

全体会・5 教科分科会：京都大学吉田南構内 吉田南 4 号館

探究分科会：京都大学医学部構内 がん免疫総合研究センター

参加人数

小中高等学校教員、教育委員会関係者、大学教員等 108 名

（国語 18 名／算・数 13 名／理科 9 名／社会 23 名／英語 15 名／探究 30 名）

後援

国立研究開発法人科学技術振興機構

実施の様子

京都大学大学院教育学研究科 教育実践コラボレーション・センター E.FORUM では、2026 年 8 月 19 日（水）に、京都大学吉田キャンパスにおいて、ワークショップ「真正で探究的な学びを実現するパフォーマンス評価」を開催しました。北は北海道から南は沖縄県まで、総勢 108 名の教職員や教育委員会関係者の方々が参加してくださいました。なお、本ワークショップは、内閣府による SIP（戦略的イノベーション創造プログラム）の課題「ポストコロナ時代の学び方・働き方を実現するプラットフォームの構築」（以下、ポストコロ SIP）（サブ課題 A 「新たな『学び』」のデザイン開発）における研究開発「真正で探究的な学びを実現する教育コンテンツと評価手法の開発」（以下、AICAN*）（研究開発責任者：松下佳代）の一環として行われました。

*プロジェクトの英語名称 “Authentic and Inquiry learning focused educational Content and Assessment developmeNt” の略称

はじめに、5 教科分科会は、全体会を吉田南 4 号館 4 共 11 講義室にて開きました。全体会では、司会進行を奥村好美准教授が行い、ポストコロ SIP AICAN 研究開発責任者である松下佳代名誉教授より「AICAN の取組——真正で探究的な学びを実現する教育コンテンツと評価手法の開発」の趣旨説明がありました。



研究開発責任者 松下佳代 名誉教授（京都大学）



全体会の様子

次に奥村好美准教授と TOPPAN 株式会社の水越駿氏より「5教科におけるパフォーマンス課題を生かしたデジタル・コンテンツと評価手法の開発」について説明がありました。



奥村好美 准教授（京都大学）



水越駿氏（TOPPAN 株式会社）

全体会終了後は、国語科、算数・数学科、理科、社会科、英語科の5教科の分科会に分かれて、ワークショップを行いました。以下に各分科会の様子をご報告します。

国語科は、本プロジェクトの共同研究者である滋賀県立大学の本宮裕示郎准教授が担当しました。「国語科でのパフォーマンス課題づくり——演劇的手法を用いた物語の読み深め」と題して、最初に「本質的な問い」「永続的理解」「逆向き設計」論等の説明とともに、2024年度開発の「ポスターにまとめて発表しよう！」（小学5年）を紹介しました。その後、前半では、「脚本を書く練習をしてみよう！」（太宰治『走れメロス』）で、暴君ディオニソスとメロスの対話場面について、セリフの抜き出し読みとセリフの前後を意識したト書きのある演劇との違いをワークショップとして体験しました。後半では、2025年度開発の「『わたし』と『ルロイ修道士』の心情を演劇的に表現してみよう」（井上ひさし『握手』中学3年）から「わたし」と「ルロイ修道士」の対話場面を抽出し、ト書きを考えながら演じるワークショップを行いました。表面的な読みにとどまらず、読めば読むほど分からないことがでてくることが、わかったつもりに留まらない読みの大切さ、文字から単語、単語から文章、文章としての一貫性を理解していく読解力を育むパフォーマンス課題を共有し、質疑応答をして終わりました。



本宮裕示郎 准教授（滋賀県立大学）



グループワークの様子

算数・数学科は、本プロジェクトの共同研究者である京都教育大学の福嶋祐貴准教授が担当しました。まずは、算数・数学科におけるパフォーマンス課題の基本について理解を深めました。具体的には、知の構造、「逆向き設計」論、本質的な問い、永続的理解という概念、算数・数学科の学習過程、算数・数学科のパフォーマンス課題の難しいところについて検討しました。その後、SIP で開発されたパフォーマンス課題を体験しました。2024 年度開発課題「都道府県のおおよその面積を求めよう」では既習の図形を活用して面積の測量を行いました。次に、2025 年度開発課題「バトンパスを数学的に考察しよう」では、グラフ作成シミュレーターを活用して、二次関数を探究しました。最後に、「データの活用」課題の良い点、もっと良くなりそうな点や算数・数学科におけるパフォーマンス課題を考える際に重要な点について、参加者同士で意見交換をしました。



福嶋祐貴 准教授（京都教育大学）



グループワークの様子

理科は、「理科におけるパフォーマンス課題の理論と実際」と題し、本プロジェクトの共同研究者である愛知県立大学の大貫守准教授に加えて、八丈町立三原中学校の片平勇紀教諭が担当しました。はじめに、大貫准教授がパフォーマンス課題の理論について解説を行いました。ここでは、さまざまな評価課題が紹介され、知識やスキルを複雑に総合して使いこなすという、パフォーマンス課題の特徴を具体的に確認していききました。また、パフォーマンス課題の基礎となる、知識の転移の重要性についても解説がなされました。次に、片平教諭によって、単元「電気の世界」を事例として、実際のパフォーマンス課題を体験するワークが行われました。参加者は、AICAN プロジェクトにおいて片平教諭・大貫准教授が共同開発したパフォーマンス課題・デジタル教材を体験しました。最後に、大貫准教授から、プロジェクトで開発されている理科のコンテンツの特徴が紹介されました。


大貫守 准教授
（愛知県立大学）

片平勇紀 教諭
（八丈町立三原中学校）


グループワークの様子

社会科は、本プロジェクトの共同研究者である弘前大学の若松大輔助教と池田泰弘准教授に加えて、弘前大学教育学部附属中学校の森山智恵美教諭が担当しました。「社会科におけるパフォーマンス課題の理論と実践」と題して、最初に若松助教より、複数の事例を交えながらパフォーマンス課題の理論について解説がありました。具体的には目標と評価を一致させることや真正性を保証すること、本質的な問いと永続的理解を指針として単元を構想しルーブリックを指導と評価に活用することの重要性について理解を深めました。この理論を踏まえて森山教諭より、明治期の社会改革と女性の生き方に注目した展示を作成させるパフォーマンス課題を用いた中学校社会科歴史的分野の実践例が紹介されました。続いて、池田准教授より実践事例をもとに、生徒が納得できる社会科評価のあり方について解説がありました。最後に本日の内容を踏まえて、よりよい社会科の評価実践に向けて、参加者同士で意見交換を行いました。



若松大輔 助教
(弘前大学)



池田泰弘 准教授
(弘前大学)



森山智恵美 教諭
(弘前大学教育学部附属中学校)



グループワークの様子

英語科は、本プロジェクトの共同研究者である元京都大学大学院教育学研究科特任教授の田中容子先生が担当しました。「英語科におけるパフォーマンス課題と英語力の育成方法」と題された本分科会では、前半に、パフォーマンス課題についての理論的な解説に加えて、英語科の内容をいかに構造化し、パフォーマンス課題を設計するかについて、具体的な事例や田中先生による整理をもとに検討が行われました。また、パフォーマンス課題に取り組むために必要な力の育成についても、児童・生徒のつまずきの例を踏まえながら、指導上の工夫が検討されました。後半には、こうした「英語の力」を支える英文読解や文法の学習について、英語学習アプリケーションの紹介と実演が行われました。



田中容子 先生
(元京都大学大学院教育学研究科特任教授)



グループワークの様子

次に、探究分科会は、医学部構内がん免疫総合研究センター（以下、CCII**）にて開催されました。京都大学大学院教育学研究科の石井英真教授と CCII の茶本健司教授、一瀬大志特定准教授、杉浦悠毅特定准教授、塚本博丈特定准教授が担当しました。最初に石井教授は、「真正で探究的な学びの現在地とその指導と評価のあり方」と題して、「探究」や「探究的な学び」について解説を行い、「共同注視」や「主体性のタキソノミー」などの概念装置を用いて「探究」の指導と評価の在り方について説明しました。次に、茶本教授は「好奇心を育てる教育の仕組み作り」と題して、CCII におけるがん治療研究の特徴を説明し、独創性の育成を中心とした教育の在り方を述べました。その後、参加者は 3 グループに分かれて、施設内を見学するとともに、一瀬特定准教授、杉浦特定准教授、塚本特定准教授の 3 氏より、研究者を志した原点やこれまでの歩み、そして現在取り組んでいる研究内容などの説明を受けました。最後に全教員と希望参加者による対面座談会が実施されました。

** 英語名称 “Center for Cancer Immunotherapy and Immunobiology ”の略称



座談会の様子

各分科会について参加者からは次のような感想が寄せられました。

演劇的手法を取り入れた国語科の学習指導について学びました。演劇にすることで、叙述からはよくわからないこと(登場人物の立ち位置や発話の際の抑揚など)がたくさんあることを実感でき、ことばの限界や非言語の重要性を感じました。逆説的ですが、言葉の限界や不十分さを感じることで、かえって言語感覚が豊かになると思いました。(国語科)

シミュレーションができる教材の良さを強く感じました。小学生向け、中学生向けの教材でも、意味付け方によっては高校生でも扱えると思いました。面積の課題は積分の話にも繋がられます。(算数・数学科)

パフォーマンス課題の本質になる部分は何か、課題設定で着目することは何か、そこからどのように逆向き設計をすればよいか、がとても分かりやすかった。(理科)

分科会の中で、それぞれの先生方のリアルな視点から授業実践について学べたこと[が良かったです]。特にパフォーマンス課題の作成についてどのような点を意識しているか、難しいことは何かなど、

共有できたことは非常にプラスになったと思います。(社会科)

具体例が豊富でわかりやすかった点[が良かったです。]例えば、ルーブリックや学校全体での到達目標なども具体例を示してくださった点は、大変参考になりました。また、学校全体でどのように取り組んだのかといった例も示してくださり、現場でのカリキュラム・マネジメントを考える上でも参考になりました。(英語科)

石井教授の「問いが変わらなければ深まりはない」という指摘が最も印象に残りました。探究のサイクルを回すこと自体が目的化し、「今日何しますか」で終わる形骸化した探究になっていないかという問いかけは、自分の指導を見つめ直すきっかけになりました。また、茶本教授が示された研究者としての基本姿勢「6 つの C」のうち、第 1 段階の好奇心[Curiosity]・勇気[Courage]・挑戦[Challenge]のような自発的なものを果たして教えることができるのか、という問いは新たな発見でした。探究[型]教育がそこを学べる領域ではないか、という位置づけに納得させられました。(探究科)

また、本ワークショップで学んだ内容を学校現場等で活用する際の可能性について、参加者からは「多忙な現場での教材開発の時間的省略と、教師自身の指導内容に対する理解を深めることができる」「アプリを活用することで、特別な実験道具を準備しなくても、教室でも実践ができる」といった感想をいただきました。一方、学校現場等で活用する際の難しさとしては「個人レベルでの活用は可能でも、他教員との協働による設計は、時間を要すると思う」「紹介されたような事例を活用する場合、授業時間を捻出する必要があるため、どの単元でも扱うということは難しいかなと思っています」といった声がありました。

E.FORUM では、今後も実践に役立つ知見を得られる、楽しくて元気の出る研修を提供していきたいと考えております。今後ともご支援のほど、よろしくお願いいたします。

※文中の [] 内は、作成者による補足です。